

露伴全集

第三十七卷

露伴全集

第三十七卷

昭和三十一年四月二十日 第一刷發行

昭和五十四年十一月十九日 第二刷發行

露伴全集 第三十七卷

定價 二千圓

著作權者

幸 田 文 ©

編 纂

蝸 牛 會

發行者

綠 川 亨

發行所

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三二六五・四二二
振替 東京六二六三四〇

目次

國譯忠義水滸全書 承前

一

後記

二七七

國譯忠義水滸全書

承前

目次

第一百一回	墳地を謀りて陰險・逆を産し、春陽を踏みて妖艶・奸を生ず……	五
第一百二回	王慶姦に因りて官司を喫し、龔端打たれて軍犯を師とす……	一四
第一百三回	張管營妾弟に因りて身を喪ひ、范節級表兄の爲に臉を醫す……	二五
第一百四回	段家莊重ねて新女婿を招き、房山寨に雙びて舊強人を併す……	三七
第一百五回	宋公明暑を避けて軍兵を療し、喬道清風を回して賊寇を焼く……	四九
第一百六回	書生談笑して強敵を却け、水軍汨没して堅城を破る……	六六
第一百七回	宋江大に勝つ紀山の軍、朱武打破す六花の陣……	七六
第一百八回	喬道清霧を興して城を取り、小旋風砲を藏して賊を撃つ……	七五
第一百九回	王慶江を渡りて捉へられ、宋江寇を勦し功を成す……	九〇
第一百十回	燕春秋林渡に鴈を射、宋江東京城に俘を獻ず……	一〇四
第一百十一回	張順夜金山寺に伏し、宋江・智・潤州城を取る……	一三三
第一百十二回	盧俊義兵を宣州道に分ち、宋公明大に毗陵郡に戦ふ……	一五六

第一百十三回	混江龍太湖に小結義し、宋公明蘇州に大會垓す	一四七
第一百十四回	寧海軍に宋江孝を弔し、湧金門に張順神に歸す	一六一
第一百十五回	張順・魂・方天定を捉へ、宋江・智・寧海軍を取る	一七七
第一百十六回	盧俊義兵を歙州道に分ち、宋公明大に烏龍嶺に戦ふ	一九一
第一百十七回	睦州城に箭・鄧元覺を射、烏龍嶺に神・宋公明を助く	二〇三
第一百十八回	盧俊義大に昱嶺關に戦ひ、宋公明・智・清溪洞を取る	二一七
第一百十九回	魯智深浙江に坐化し、宋公明錦を衣て郷に還る	二三三
第一百二十回	宋公明・神・蓼兒洼に聚り、徽宗帝夢に梁山泊に遊ぶ	二五七

第一百一回

墳地を謀りて陰險・逆を産し、春陽を踏みて妖艶・奸を生ず

話說す、蔡京、武學中に在りて、那の他が兵を譚ずるを聴かずして、仰いで屋角を視るの這箇の官員、姓は羅名は猷、祖貫雲南軍達州の人、見に武學諡と做るものを査問せんとす。當下蔡京怒氣胸に填ち、正に發作せんと欲す。天子の駕到り報來るに因りて、蔡京遂に此事を放下し、百官を率領し、聖駕を迎接して學に進め、拜舞山呼す。道君皇帝武を講ずる已に畢る。當有の武學諡羅猷、蔡京の口を開くを等たず、上前俯伏し、先づ啓奏し道ふ、武學諡小臣羅猷、萬死を冒し、謹んで淮西の強賊王慶が反を造せる情形を將て、聖聰に上達せん、王慶亂を淮西に作す茲に五年、官軍敢て抵敵せず、童貫・蔡攸、旨を奉じて淮西に往きて征討し、全軍覆没し、罪を懼れて隠匿し、陛下を欺誑し、説ふ軍士水土服せず、櫓に且兵を罷むと、以て大患を養成するを致す、王慶勢愈猖獗、前月又臣が郷雲安軍を將て攻破し、擄掠淫殺、慘毒言説するに忍びず、通じて共に八座の軍州、八十六箇の州縣に占據す、蔡京經體贊元し、其子蔡攸是の如く軍を覆へし將を殺し、國を辱め師を喪ふ、今日聖駕未だ臨せざる時、猶儼然として上坐に兵を譚じ、大言慙せず、病狂して心を喪へり、乞ふ陛下速やかに蔡京等國を誤る

(一) 經體贊元、丞相の役目なり、天下の大事を主り君主の玄德を贊輔す。

の賊臣を誅し、將を選み兵を發し、速やかに征勦を行ひ、生民を塗炭に救ひ、社稷を保ちて以て無疆にしたまはば、臣民幸甚、天下幸甚ならんと。道君皇帝奏を聞き、大に怒りて、深く蔡京等隱匿の罪を責む。蔡京等に巧言宛奏せらるゝに當つて、天子即ち罪を加へず、駕を起し宮に還る。次日又亳州の太守侯蒙有り、京に到り聽調し、上書して童貫・蔡攸が師を喪ひ國を辱むるの罪を直言し、并に宋江等の才略人に過ぎ、屢奇功を建て、邊を征して回り來り、又河北を定め、今已に凱を奏し師を班す、目今王慶猖獗なり、乞ふ陛下下勅を降し、宋江等を將て先づ褒賞を行ひ、即ち這の(一)支の軍馬を着て淮西を征討せしめば、必ず大功を成さんと薦擧す。徽宗皇帝奏を准し、隨即旨を降し、省院に下して宋江等を封ずる官爵を議せしむ。省院官、蔡京等と共に商議同奏す、王慶、宛州を打破す、昨禹州許州葉縣三處より申文告急する有り、那の三處は是東京所屬の州縣にして、神京に隣近す、乞ふ陛下、陳瓘・宋江等に勅して、必ずしも師を班し京に回らず、他をして軍馬を統領し、星夜に馳せて禹州等の處を救はしめたまへ、臣等、侯蒙を保舉して行軍參謀と爲らしめ、羅戡素より韜略有れば、他をして侯蒙と共に陳瓘の軍前に到りて用を聽かしめん、宋江等正在征勦し、未だ陞受に便ならず、淮西凱を奏するを待ちて、另に酌議を行ひ封賞せんと。原來蔡京、王慶那里の兵強く將猛なるを知り、童貫・楊戡・高休と計議し、故意に侯蒙・羅戡を將て陳瓘の那里に送到し、只宋江等の敗績し、侯蒙・羅戡の他を怕れて天に走上るを等つ、那時却て是一網に打盡するにあらずやとす。話は絮繁にせず、却て説く那の四箇の賊臣の條議、道君皇帝、一々奏を准し、旨を降し勅を寫し、就ち侯蒙・羅戡をして詔勅を齎捧し、及び賞賜の金銀段疋袍服衣甲馬匹御酒等の物を領し、即日起行し、馳せて河北に往き、宋江等に宣諭し、又該部に勅し、河北新復の各府州縣缺く所の正佐官員を將て、速やかに推補を行ひ、勅限して星馳して任に赴かしむ。道君皇帝剖斷必ず人なり、已に畢り、復王黼・

好からしむ。李逵、燕青、伴當に扮し、各行李を挑ひ山を下る。紫頭領都て送つて金沙灘に到り銭行す。軍師吳用、再三李逵に分付し道ふ、徐聞常山を下り、好夕事を惹く、今番哥と東京に去きて燈を看る、閒時に比きに非ず、路上酒を喫するを要せず、十分小心在意して、往常の性格を使ひ得ざれ、若衝撞する有らば、弟兄們厮見るを好まず、以て相聚まり難からん。李逵道ふ、軍師の憂心を索めず、我がこの一遭竝に事を惹かじと。相別了り、路を取り程に登る。濟州路を抹過し、滕州を経、單州を取り、曹州に上り來り、東京を前望し、萬壽門外に、一箇の客店を尋ねて安歇下す。宋江と柴進と商議す、此は正月十一日的话なり。宋江道ふ、明日白日裏には我斷然敢て城に入らず、直ちに正月十四日夜の人物喧譁するに到り、此時方に城に入る可し。柴進道ふ、小弟明日先づ燕青と城中に入り去り、探路一遭せん。宋江道ふ、最も好し。次日柴進一身の整々齊々の衣服を穿ち、頭上の巾幘新鮮に、脚下の鞋襪乾淨なり。燕青の打扮更に是俗ならず、兩箇店肆を離れし、城外の家を看る時、家々熱鬧、戸々喧譁、都て元宵を慶賞するを安排し、各太平を賀するの風景を作す。城門下に來到するに、人の阻當する没し、果然好(一)座の東京の去處。怎に見得たる、

州は汴水と名づけ、府は開封と號す、逶迤として吳楚の邦に接し、延互して齊魯の境を連ぬ。山河の形勝、水陸の要衝、禹は畫して豫州と爲し、周は封じて鄭の地と爲す。層疊たる臥牛の勢、上界の戊己中央を按じ、崔嵬たる伏虎の形、周天の二十八宿に像る。金明池上の三春の柳、小苑城邊の四季の花、十萬里の魚龍變化の郷、四百座の軍州輻輳の地、靄々たる祥雲紫閣を籠め、融融たる瑞氣樓臺を照らす。

- (一)是非に。(二)引とゞめ。(三)紅い痕。(四)非役官員。(五)承局、前に出づ、官員のつき人。(六)好歹は好き悪き也、いつもといふ意となる。(七)二度と仲間となり得じ。(八)戊己中央、土德。(九)軍も

我が城池を傾覆し、我人民を芟夷し、我が邊陲を虜劉し、我が西方を蕩搖するに因り、仍て陳瑊に勅して安撫と爲し、宋江を平西都先鋒と爲し、盧俊義を平西副先鋒と爲し、侯蒙を行軍參謀と爲し、詔書到る日、即ち軍馬を統領し、星馳して先づ宛州を救はしむ。爾等將士力を協せ忠を盡せ。功蕩平を奏せば、定めて封賞を行はん。其三軍の頭目、欽賞未だ數かざる如きは、陳瑊をして河北州縣内の豐盈の庫藏中に就て那撮して給賞し、冊を造りて奏聞せしむ。爾其欽め哉。特に諭す。

宣和五年四月 日

侯蒙丹詔を讀み罷る。陳瑊及び宋江等、山呼萬歲し、再拜して謝恩已に畢る。侯蒙金銀段疋等項を取過し、次に依り名に照らして給散す。陳安撫及び宋江・盧俊義、各黃金五百兩、錦段十、表裏錦袍一套、名馬一匹、御酒二瓶、吳用等三十四員に各白金二百兩、綵段四、表裏御酒一瓶を賞し、朱武等七十二員に各白金一百兩、御酒一瓶を賜ひ、餘下の金銀は陳安撫處湊足し、軍兵に俵散し已に畢る。宋江復張清・瓊英・葉清をして、田虎・田豹・田彪を押解して京師に到り、俘を獻じ去らせしむ。公孫勝來り稟す、乞ふ兄長、五龍山龍神廟中五條の龍の像を修めよと。宋江依允し、匠を差して修め塑す。宋江、戴宗・馬靈を差はして、往いて各路の守城の將士を諭し、一に新官の到來するを等て、即ち交代を行はしめ、兵を勅して前來して王慶を征勦せしむ。宋江又數日を料理し了す、各處新官皆到り、諸路の守城の將佐、軍兵を統領して陸續到來す。宋江、欽賞の銀兩を將て俵散し已に畢る。宋江、蕭讓・金大堅をして碑石を鐫勒し、其事を記敘せしむ。正に五月五日天中の節に値ふ、宋江、宋清をして大に筵席を排せしめ、太平を慶賀し、陳安撫を請うて上坐にし、新任太守及び侯蒙・羅歆並に本州の佐貳等の官之に次ぎ、宋江以下除張清の京に往ける外、共一百單七人、及び河北の降將喬清・孫安・卞

祥等二十七員、整齊、兩邊に排坐す。當下席間に陳壇・侯蒙・羅戩、宋江等の功勳を稱贊す。宋江・吳用等、三位の知己に感激し、或は朝事を論じ、或は衷曲を訴へ、觥籌交錯して燈燭輝煌し、直に飲んで夜半に至り方に散ず。次日宋江と吳用と計議し、兵馬を整點し、州官に辭別し、威勝を離了し、陳壇等の衆と共に南を望んで進發し、過ぐる所の地方、秋毫も犯す無し。百姓香花燈燭し、道路に絡繹し、宋江等の賊寇を剪除し、我毎百姓、再び天日を見るを得るの恩を拜謝す。説かず宋江等の南を望みて征進するを、再説く沒羽箭張清と瓊英・葉清と、陷軍を將て田虎等を解するに因りて、已に東京に到り、先づ宋江の書札を將て宿太尉に呈達し、并に金珠珍玩を送る。宿太尉上皇に轉達す、天子大に瓊英母子の貞孝を嘉し、勅を降して特に瓊英の母宋氏に贈つて介休の貞節縣君と爲し、彼處の有司をして坊祠を建造し、貞節を表揚せしめ、春秋享祀せしむ。瓊英を封じて貞孝宜人と爲し、葉清を正排軍と爲し、白銀五十兩を欽賞し、其義を表揚し、張清、舊日の原職に復還し、仍三人をして宋江を協助して淮西を征討せしめ、功成つて陞賞せんとす。道君皇帝、法司に勅下し、反賊田虎・田豹・田彪を將て、市曹に押赴し、凌遲碎剮せしむ。當下瓊英父母の小像を帶得し、監斬官に稟過し、仇申宋氏の小像を將て法場中に懸掛し、像前に卓子を擺張し、等つて午時三刻に到る。田虎開刀碎剮せらるゝ後、瓊英、田虎の首級を將て擺して卓上に在き、血を滴らして父母を祭奠し、放聲大哭す。此時瓊英這段の事、東京已に傳へ遍了し、當日觀る者、塚の如し。瓊英の哭し得て悲慟するを見て、感泣せざる無し。瓊英祭奠已に畢り、張清・葉清と闕を望み恩を謝す。三人東京を離了し、逕ちに宛州を望み進發し、來つて宋江を助けて王慶を征討す。話下に在ら

(七) 虔劉二字疑ふ可し、誤ならん。(八) 擲撮なり、移し取り、流用。(九) 表裏は表裏つき居る也。(一〇) 上皇、皇上に作るべし。(一一) 塚は堵に作るべし。

ず。看官話頭を牢記して仔細に聽着せよ。且王慶の幼より長に至るの事を把つて表白し出し來らん。那の王慶は原是東京開封府内の一箇の副排軍。他の父親王善は是東京の大富戸、專一に衙門を打點し、擻唆し、結訟し、放刁把濫し、良善を排陷す。此に因りて人都て他に些箇を譲る。他一箇の風水先生を聽信し了し、一塊の陰地の當に大貴の子を出すべきを看中し了す。這(一)塊の地は就ち王善の親戚の人家の葬過するのなり。王善と風水先生と計を設けて陷害し、王善出矢し那家をとつて(一)紙の謊狀を告ぐ。官司累年、家産蕩盡して、那家王善に敵し過ず、東京を離れし、遠方に居住す。後來王慶反を造し、三族皆夷らげらる、獨此家遠方に在り、官府は王善に害せられたるを查出し、獨り保全を得たり。王善那の(一)塊の墳地を奪了し、父母を葬過す。妻子懷孕月に彌り、王善夢む、虎室に入り、堂西に躑躅す、忽ち獅獸に突入され、虎を將て銜み去らるゝを。王善覺來り、老婆便ち王慶を産む。那の王慶小より浮浪し、十六七歳に到り、生れ得て身雄に力大、去つて讀書せず、専ら雞を闘はせ馬を走らせ、鎗を使ひ棒を輪するを好む。那の王善夫妻兩口兒、單々に王慶一箇を養得て、十分愛恤し、自來短を護し、他に恐せて慣らす、長大に到得て如何ぞ拘管し得て下さん。王慶賭博は是錢兒、宿的は是娼兒、喫的は是酒兒、王善夫婦也時有りて他に訓誨すれば、王慶逆性發作し、父母を將て冒罵す。王善奈何ともす可き無し、只索他に由す。六七年を過了して、箇の家産を把つて費し得て罄盡し、單に一身の本事に靠着して、本府に在りて箇の副排軍と充做る。一たび錢鈔の手に在る有れば、三兄四弟、終日大酒大肉僧同に喫す、若是些の不如意の時節有れば、拳頭を拽出して便ち打つ、所以に衆人又他を懼怕し、又他を喜歡す。一日王慶五更に衙に入りて晝卯し、幹辦して執事を完了し、閒歩して城南に出で、玉津園に到りて遊玩す。此時是徽宗の政和六年、仲春の天氣、游人蟻の如く車馬雲の如し。正に是

上苑花開きて堤柳眠る、游人隊裏嬋娟雜はる。金勒馬は嘶く芳草の地、玉樓人は醉ふ杏花の天。

王慶獨自に閑憂し了る一回、那の圃中の一顆の池に傍ふの垂楊上に向て、肩胛を將て斜に倚着し、箇の相識の到來を等つて、同じ酒肆中に去いて三盃を喫し城に進まんと欲す。時を移す無く、只見る池邊に十來箇の幹辦處候伴當、養娘人等、一乘の轎子を簇着す。轎子の裏面は、花の如く朶の似き的一箇年少の女子なり、那の女子、景致を看んと要て竹簾を用ひず。那の王慶、好む的は是女色、這般の標致的女子を見了し、箇の魂靈を把つて、都て吊下し來る、認得たり那の影の幹辦處候は是樞密童貫の府中の人なるを。當下王慶遠く地に轎子に跟着し、那の影の人に隨了し、艮嶽に來到す。那の艮嶽は京城の東北隅に在り、即ち道君皇帝の築く所、奇峰怪石古木珍禽亭榭池館、勝げ數ふ可からず、外面は朱垣緋戸、禁門の如く一般なり、内相禁軍有りて看守し、等閑の人は脚指頭兒も也敢て門前に到せず。那の(一)簇の人、轎を歇下し、養娘、女子を扶けて轎より出了し、逕に艮嶽門内を望んで、嬢嬢と妖々嬌々と走進し去る。那の看門の禁軍内侍、都て(二)條路を讓開し、他をして走進し去了せしむ。原來那の女子は童貫の弟童貫の女、楊戩の外孫、童貫撫養して己の女と爲し、蔡攸の子に配するを許す、却て是蔡京的の孫兒の媳婦なり、小名嬌秀と叫做す、年方に二八、他童貫に稟過し、天子兩日李師師の家に在りて娛樂するに乘じ、艮嶽に到りて游玩せんと欲す。童貫預め先づ禁軍人役に分付す、

(一)役所に手を入れ置きて、いろ／＼にして訴訟事などなし、よつて以て私を營み無理を爲し利を取る。
(二)墓地の相によりて其家將來榮枯起倒ある由を説き、爲に墓を相する先生。支那に古く且廣くして牢き俗間信仰ある也。
(三)こしらへ事の訴訟を仕掛けたる也。
(四)惡きを惡きとせず、理窟をつけて却て辯護するが短を護する也。
(五)執務。
(六)おつきの女。
(七)皇居同様也。

此に因りて敢て攔阻せず、那の嬌秀兩箇の時辰を進去し了して、元是出來るを見ず。王慶那厮呆々地に外面に在りて守着す、肚裏飢餓し、東街の酒店裏に逕到し、些の酒肉を買ひ、忙々地に六七盃を喫了し、那の女子去了するを恐怕し、帳を連ねて也算せず、便袋裏向り一塊の二錢の重的の銀子を摸出し、店小二に手與して道ふ、少停して便ち來り算帳せんと。王慶再び良獄前に逕到して、又停すする一回、只見る那の女子、養娘と共に、輕く蓮歩を移して良獄より走出し來り、且轎に上らずして那の良獄の外面的の景致を看る。王慶逕上前去し、那の女子を看る時、眞箇に標致あり。混江龍の詞有り、證と爲す。

丰資毓秀、那里的箇の金屋收むるに堪へたる、點ずる櫻桃の小口、横たはる秋水の雙眸。若是昨夜晴開して新月皎きにあらずんば、怎で能く得ん今朝腸は小梁州に斷つを。芳芬綽約蕙蘭の儔、香飄雅麗芙蓉の袖。兩下裏、心猿都て月に引き花に鉤せらる。

王慶見て好處に到り、覺えず心頭撞鹿し、骨軟に筋麻し、好し便ち雪獅子の火に向へるに似て、霎時間に半邊を酥す。那の嬌秀、人叢裏に在りて王慶の相貌を窺見す。

鳳眼濃眉畫くが如く、微鬚白面紅顔。頂平に額潤くして天倉滿ち、七尺の身材壯健に、善く香を偷み玉を竊むを會し、俏を賣り好を行ふに慣れた、眸を凝らし呆想して人前に立つ、俊俏風流限無し。

那の嬌秀一眼に王慶の風流を睨着し、也他を看上し了す。當有の幹辦處候、衆人を喝開し、養娘、嬌秀を扶けて轎に上す。衆人簇擁着して東に轉じ西に過ぐ、却て酸棗門外獄廟裏に到り來つて燒香す。王慶又跟隨して獄廟裏に到る、人山人海的挨擠し開かず。衆人は童樞密の處の處候幹辦なるを見て、都て(一)條路を讓開す。那の嬌秀轎を下り進香す。王慶挨趲上前せんとするも、却て是身に近づく能はず、又隨從人等の叱咤するを恐れ、廟祝

と厭熟するを假意し、他を幫けて燭を點じ香を燒き、一雙眼不住的に那の嬌秀に溜す、嬌秀も也眼を把り來つて頻りに咬る。原來蔡攸の兒子生來是 歡喜的、那の嬌秀家に在りて幾次の媒婆の是眞なりと傳説するを聽得て、日夜叫屈怨恨す。今日王慶の風流俊俏なるを見了し、那の小鬼頭兒の春心也動了す。當下童府中の一箇の董虞候、早く已に膳科し、排軍王慶なるを認得し、董虞候王慶を把つて劈臉一掌に打去り、喝し道ふ、這箇は是甚麼の人家の宅眷ぞ、你是是開封府の一箇の軍健、你好だ大膽なり、如何ぞ也這里に在りて挨く擠くたるや、待て俺相公に對して説了し、你的この(一)顆の驢頭をして安て頸上に牢在せざらしめん。王慶那ぞ敢て聲を則さん、頭を抱いて鼠竄して、廟門を奔出し來り、一口の唾を噎いて叫聲し道ふ、碎、我直恁這般の欺騙蝦蟆なり、怎ぞ天鷲の肉を喫するを想はんと、當晚氣を忍び聲を呑んで、慙愧して家に回る。誰か知らん那の嬌秀、府に回り、倒つて是日夜に思想し、厚く侍婢に賄し、反つて去いて那の董虞候に問ひ、他をして王慶の詳細を説かしむ。侍婢、一箇の薛婆子と相熟し、他と共に馬泊六を做し了し、悄悄地に王慶を勾引して後門より進來せしめ、人知らず鬼覺らず、嬌秀の與に勾搭す。王慶那厮、喜望外に出で、終日酒を飲む。光陰荏苒、三月を過了し、正に是樂極まり悲を生ず、王慶一日喫し得て爛醉して泥の如く、本府正排軍張斌面前に在りて馬脚を露出し、遂に此事を將て彰揚開去し、吹いて童貫の耳朶裏に在るを免れず。童貫大に怒り、要す罪過を尋ねて他を擺撥せんこと

- (一九) 鉤は拘として讀むべし。(二〇) 心臓どきどきとなり。(二一) すぐ半分ばかり軟らかに解けかゝつたり。
(二二) 天倉は觀相家の語、顔を三分して其上部。(二三) 色事、密通。(二四) いきなどころを見せ、人たらしをする。
(二五) 氣に入り、おぼえしみたる也。(二六) 神主と懇意な者のふりをして。(二七) 馬鹿也。(二八) ことむすめ。
(二九) 則是作と音近き也。(三〇) 碎は碎也、字の義を取らず、聲を取るべし。チエツといふ也。
(三一) ばかなくそ蝦蟆。(三二) 思想は戀慕に同じ。(三三) 男女通奸の道をなすを馬泊六といふ也。